

# 旧石器考古学

70

## 〈特集 有茎尖頭器〉

- 有茎尖頭器石器群をめぐる行動論的研究  
— 複数階層分析枠を利用した領域分析 —…………… 及川 穰 (1)
- 近畿地方における有茎尖頭器の基礎的研究…………… 光石鳴巳 (11)
- 四国地域の有茎尖頭器 — 高知県不動ヶ岩屋洞窟出土資料の再検討 —…………… 氏家敏之 (21)
- 九州の槍先形尖頭器と有茎尖頭器…………… 杉原敏之 (31)
- 中国地方における縄文時代草創期遺跡の一樣相  
— 岡山県大河内遺跡の発掘調査 —…………… 小嶋善邦 (39)
- 有舌尖頭器の製作技術について — ティム・ディラードの復元製作から —…………… 長井謙治 (43)
- 
- 本州東北部にみられる大型両面加工石器群の研究  
— 新ドリラス期相当の寒冷環境への人類の適応行動 —…………… 鹿又喜隆 (59)
- 【研究ノート】 エネルギー所要量からみた後期旧石器時代の動物必要量  
…………… 秦 昭繁 (71)
- 公開セミナー『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』参加記…………… 森先一貴 (79)
- 宮城県加美郡加美町葉菜原No.15遺跡の調査…………… 吉田 桂 (85)
- 石壮里博物館…………… 鄭 在 鶴 (92)
- 〔書評〕 山田 哲著『北海道における細石刃石器群の研究』…………… 高倉 純 (93)
- 〔書評〕 林 茂樹・上伊那考古学会編『神子柴』…………… 上峯篤史 (97)
- 〔新刊紹介〕 小野 昭著『旧石器時代の日本列島と世界』…………… 佐藤良二 (99)
- 第21回 東北日本の旧石器文化を語る会報告…………… 立木宏明 (101)
- 東海石器研究会の活動について…………… 長澤有史 (103)
- 第33回 九州旧石器文化研究会福岡大会…………… 吉留秀敏 (105)
- 第24回 中・四国旧石器文化談話会…………… 小嶋善邦 (107)
- 旧石器文化談話会定例会報告…………… 松浦五輪美・森川 実 (108)
- 旧石器文献紹介…………… (109)
- 会告…………… (112)

2008・7

旧石器文化談話会



## 〔書評〕

林 茂樹・上伊那考古学会 編

# 『神子柴』

後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究

2008年2月9日発行 信毎書籍出版センター 本体10,000円+税

A4版、331頁 巻頭図版8頁 写真図版76頁 付図1枚 CD-ROM 1枚

上峯篤史

## I はじめに

神子柴遺跡は、その特殊な出土状況と優美な石器が注目を集め、第1次調査当初から、多くの議論が重ねられてきた。遺跡の発見・発掘から50年たった現在、ようやく本報告書が刊行され、遺跡の詳細な情報が万人に共有できるようになったことは、今後の研究の発展にとって重要な意義をもつ。

神子柴遺跡は、長野県上伊那郡南箕輪村7888番地に所在し、石器が出土した地点は、大清水川によって開析された、南北約300m、東西約100mの孤立丘陵上の東端部に位置する。在野の考古学者である林茂樹氏によって1958年に発見され、これまで試掘調査が1回、発掘調査が3回おこなわれている。このうち、第3次調査についてはすでに報告書（南箕輪村教育委員会1969）が刊行されており、本書には試掘調査、第1次調査（1958年）、第2次調査（1959年）で確認された、A地点の発掘調査成果が収録されている。

## II 本書の内容と特色

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 神子柴遺跡の発掘調査
  - 第1節 神子柴遺跡の概要
  - 第2節 神子柴遺跡の発掘調査の経過
- 第2章 神子柴遺跡の環境
  - 第1節 神子柴遺跡の自然環境
  - 第2節 神子柴遺跡の歴史的環境
- 第3章 神子柴遺跡の石器分布
  - 第1節 神子柴遺跡の層序
  - 第2節 神子柴遺跡の石器分布と出土状態
- 第4章 神子柴遺跡の遺物
  - 第1節 神子柴遺跡の石器
  - 第2節 神子柴遺跡第1次発掘調査出土石器
  - 第3節 神子柴遺跡採集とされる石器
- 第5章 神子柴遺跡の研究

- 神子柴遺跡の石器包含層のテフラ分析（河西 学）
- 神子柴遺跡第1次発掘試料のテフラ分析（河西 学）
- 神子柴遺跡の黒曜石の分析（鈴木正男、渡辺圭太）
- 神子柴遺跡出土石器の産地推定（望月明彦）
- 神子柴遺跡出土石器の石材とその原産地の推定（中村由克）
- 神子柴遺跡の石斧と日向林B遺跡の斧形石器（谷 和隆）
- 神子柴型尖頭器の形態的枠組み（須藤隆司）
- 神子柴遺跡における石器の機能推定（堤 隆）
- 神子柴遺跡における石器分布の形成（堤 隆）
- 神子柴石器群の時間的位置と出自問題（堤 隆）
- 神子柴遺跡の生活と集団（稲田孝司）

第6章 要旨（丸山敏一郎、堤 隆）

第7章 写真図版

本書の第1の特色は、調査記録の充実である。注目すべきは記録の緻密さであり、遺跡の発見から発掘調査の進行状況、石器の出土状況にいたるまで、克明に記録されている。また記述からは、重大な発見を目の当たりにして高揚する調査団の様子を、臨場感をもって追体験することができる。

本書の第2の特色は、出土状態についての詳細な情報提示である。各石器の出土状態や、集中地点の状況が丁寧に解説されており、本文中や巻末の写真図版、添付のCD-ROMに収められた写真は、理解の助けとなる。また発掘調査時の記録が徹底的に吟味され、出土状態を復元するうえで留意すべき点についても、丁寧に記述されている。これは、石器の出土状態や分布状況が大きな論点となってきた本遺跡の研究において、極めて重要な側面である。今後の研究の実証性・信頼性を高めるうえで、大きく寄与すると評価できよう。

本書の第3の特色は、87点の出土石器のうち、83点の実測図が掲載されている点である。さらに所在不明の石刃1点を除く82点については、カラーの展開写真が巻末の写真図版や添付CD-ROMに収録されてお

り、今後、重宝されるであろう。

考察編が充実している点も、本書の重要な特色であり、11編もの多彩な研究論文が掲載されている。

河西論文、鈴木・渡辺論文では、本石器群の年代を考える上で定点となる情報を提供している。ただし、鈴木・渡辺論文で分析された「神子柴遺跡出土黒曜石試料12点」が、どの資料に該当するのかが明確ではなく、提示された年代値を活用することが難しいように思われる。

石材の産地推定にあつては、黒曜石や下呂石はエネルギー分散蛍光X線分析法が適用されており、黒曜石は和田峠付近、下呂石については湯ヶ峰産とされている。その他の石材については、緻密な鏡下観察と石材産地候補地の踏査に基づいて産地が推定されており、重要な成果があがっている。尖頭器や搔器に利用されている玉髓や珪質頁岩は新潟方面、石斧の石材となっている黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩などは神子柴遺跡付近に産地が求められ、先の黒曜石の産地推定結果と合わせて、著しい多様性をみせている。

こうした分析結果をもとに、稲田論文では、集団の移動行程と石器製作の循環過程を説く。神子柴遺跡を残した集団が各石材産地を経由しながら、最低4回の居住、3回の移動を繰り返したことが推定されており、当該期の人類活動圏を考えるうえで、興味深い問題提起となっている。

一方、使用痕分析においても、重要な成果があがっている。尖頭器については、Cutting と Whittling が推定され、乾燥皮を対象としたことを示す光沢も検出されるなど、尖頭器の機能を考えるうえで注目すべき指摘となっている。搔器についても、切削を示す結果が得られるなど、従来の想定に再考を迫る内容となっている。また石斧には使用痕が観察されなかった点についても、今後の論議が注目される点である。

堤論文（「神子柴遺跡における石器分布の形成」）では、以上の基礎分析の成果を余すところなく活用しつつ、「もうひとつの神子柴論争」（田中 2001）と呼ばれる、遺跡の性格論に言及している。「重量分布」、「器種別分布」、「使用痕の観察された石器の分布」、「先端の向き」、「色分布」、「石材分布」、「炭化物の分布」、「垂直分布」、「遺跡立地」を検討した結果、本遺跡の石器分布を南北の2群に分け、それぞれ「使用前

もしくは使用頻度の浅い石器類の『管理空間』と「消費空間」もしくは「消費中の道具の管理空間」と推定している。一方、稲田論文においては、石核・大型石斧・尖頭器の目立つ北群を男性と、搔器・削器などが多い南群を女性と関連づけて、本遺跡を残した集団の構成を推定している<sup>1)</sup>。

### III おわりに

神子柴遺跡の石器分布および遺跡の性格論をめぐる論考は、「移行期」と形容される当該期の石器群のみならず、縄文時代・弥生時代にしばしば見られる、石器の集中的・集積的な出土状況を考察する際にも参考になる。とりわけ「製品のデポ遺構」（田中 2001）と表現されるようなケースについては、本書をはじめ、本遺跡の研究史の中で開発されてきた多様なアプローチを駆使することで、新たな知見を得ることができよう。そうした他時期・他地域の事例研究の蓄積が、本石器群や類似の石器群の研究に対して、新たな視点を提供するかもしれない。

本報告書はいわゆる「移行期」の石器群の代表である神子柴遺跡の石器群について、高精度の情報を提供するだけでなく、石器研究の発展に寄与しうる重要な視点と成果をふくむものとして、高く評価されよう。神子柴遺跡の調査および本報告書の作成に関わられた方々に深い敬意を表したい。

また本書の重要性に鑑み、今回の執筆をお勧めいただいた松藤和人先生にも感謝の意を表したい。筆者の不勉強ゆえ、本書の内容を十分に紹介・評価できなかったと自戒するが、一人でも多くの方々が本書を紐解かれることを念じつつ、この評文を閉じることとしたい。

### 補注

1) ただし両者（堤、稲田）の言う「北群」、「南群」は完全に一致するわけではない。

### 引用・参考文献

- 田中英司 2001 『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学研究叢書 1、平電子印刷所。  
南箕輪村教育委員会 1969 『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書—第三次発掘調査—』。

# 投稿規定

- 執筆者の所属、研究地域を問わず、ご投稿を歓迎します。
- 原稿は、原則として旧石器時代または第四紀更新世に関する研究論文、研究ノート、邦訳、資料紹介、書評、学界動向、文化財保護問題などに限ります。
- 原稿は、挿図・表・写真などを含めて本誌割付による20頁(400字詰105枚分)以内を原則とし、規定枚数をこえる場合は、超過頁分の実費を執筆者のご負担とさせていただきます。
- 原稿は横書き、図面・写真類の大きさはキャプションを除き、1頁大タテ19cm・ヨコ14cmを版面とします。なお、図面・写真類は仕上がりに希望サイズに縮小したコピーを添付して下さい。
- 補注、参考・引用文献などの記し方は、最新号をご参照ください。引用文献には必ず頁数を明記してください。
- 原稿の締切りは、6月末および11月末です。締切り後の投稿は、次号にまわすことがあります。
- 原稿の採否については、査誌結果にもとづき、編集部から通知いたします。原稿・図面・写真類は、お申し出に応じて返却します。とくにお申し出のない場合は、編集部で保管します。
- 原稿を本誌収載の場合、掲載誌(最高2部)と別刷(30部)を進呈いたします(送料別)。なお、本誌・別刷進呈部数は連名原稿の場合も原則としてこれに準じます。また、掲載原稿につきPDFデータとして提供をご希望の方にはCDにて提供いたします。
- 発掘調査報告書の案内、書店その他の広告文も掲載に応じます。広告文のサイズは1頁大、半頁大の2種類で実費を頂戴します。旧石器文献紹介欄をご利用の場合は、当該印刷物の寄贈に代えます。
- ワープロ・パソコン原稿を原則とします。1行24字で印字し、行数は任意に設定して結構ですが、印字原稿も送付ください。なお、たとえ1頁分の原稿であってもフロッピーディスクをご提供ください。その際、機種名やアプリケーション名などをお知らせください。できるかぎり、テキスト形式のファイルを送付ください。
- 論文、研究ノートには必ず英文要旨を付載してください。その際、和文要旨も送付ください。なお、英文要旨を付載しない原稿でも、表題の英語表記をお知らせください。
- 投稿の連絡は、原稿締切りの1ヵ月前までをお願いします。
- 原稿の送付先は、中川和哉宛(〒617-0006 京都府向日市上植野町山ノ下12-19)をお願いします。

旧石器文化談話会会誌編集委員会

## 編集後記

今号は有茎尖頭器の特集を掲載しました。上黒岩岩陰の遺物の再評価の成果の影響を受け、研究が活発化しているように感じます。長井さんには有茎尖頭器の製作実験の原稿を投稿していただきました。有茎尖頭器の出来栄えにただただ驚かされました、また木葉形の母型から斜並行剝離による整形加工というプロセスは、氏家さんの論考とも合致します。

吉田桂さんには、藤村新一氏が所属していた東北旧石器文化研究所によって発見され、旧石器時代の遺跡としては1度取り消された葉原No.15遺跡の再調査の概要を寄稿していただきました。遺跡の汚名が晴らされた稀なケースとなります。

69号を発行した直後の2007年11月27日、中国旧石器考古学界の重鎮のひとりであった張森水先生がお亡くなりになりました。1992年に古脊椎動物与古人類研究所に訪れた際、張先生が両袖の木製の机の前に座り悠然とされていた姿が目に残ります。その訪問時に、周口店遺跡出土の石器を見せていただきましたが、本物の石器をわれわれに見せるため、わざわざ博物館から借り出されたとき大変恐縮しました。先生の中国旧石器研究における功績は枚挙に暇がありませんが、日本においても中国旧石器入門書としての『中国旧石器文化』を読んだ人は少なくないでしょう。ご冥福をお祈りします。(中川)

## 旧石器考古学 70

編集 旧石器文化談話会 ©  
発行  
発行日 2008年7月31日  
発行所 〒602-0047 京都市上京区今出川新町上ル  
同志社大学 考古学研究室気付  
(TEL & FAX 075-251-3437)  
振替 01080-7-30936  
印刷 有限会社 真陽社  
〒600-8475 京都市下京区油小路  
仏光寺上ル